特別
へ5
6590
1(3)

へ5
6590
1-3

春雨

春雨

こゝろこゝろを分て雨をたゞ
雨八人々のとるまゝにして
その物こゝろやとうさゝめる
いさゝ月も雨もそれりやうの財
雨

紙子ゆり　洒中居
之考

業の戸の奥物ゆゝ鬼の夢

よるくるたに分ふりの友　松房

ふるさとの花ゆゑ加減と偽詠て　千梅

井のそとうよりはなるもの　宗祇

ちさい山大さ如の時なれハ　紀和

旬雑なるもこゝのおろし　茅堂

こゝ地なるまのひけるゝ　東也

先訪て立くもまれ桜　湾橋

ゆまのうゆハなるゝ程見ゆ　十千

曲輪ゝ月と山ぬるゝ梅堂　当堂

うゝ国を掃るこゝのむれや　逸碩

机の高低を雨のはれく　計周

暮ゝるゝ梅の御目をたゝてゝる　後

剃ゝこゝるゝ花の高さ　芳

おゝの衣ゝそふ紙ゝ　竹

さ自ゝ来ゝ孔雀ゝ　梅

ひゝるゝゝなるゝハ護ゝ　橋

ちいとゝゝ沢ゝる鼓鍋　和

ゝ月の頃ハ法ゝ　堂

[illegible]の中に道のいと筋　巴
遥別[illegible]をたゝく金　二
けうけて又飯[illegible]かさ〳〵　酸
ふしぼやとものさく[illegible]の昆[illegible]　周
[illegible]ひき[illegible]の[illegible]　千

名残

世[illegible]皆[illegible]のやうしき[illegible]　仲周

[illegible]に[illegible]二十畳　[illegible]
見[illegible]を[illegible]のなる[illegible]　東巴
人[illegible]に[illegible]の中　滄海
[illegible]や[illegible]記[illegible]のそる　[illegible]
山[illegible]八[illegible]　[illegible]
り[illegible]の[illegible]　宗[illegible]
[illegible]日八[illegible]　第二
[illegible]他や[illegible]　十千

新古今の新たなるを撰ばれ　後鳥羽

結ぶより一筋　法印

いねのもちるを見て詠ずる　加賀

ふるさとの秋ものこるなかりけり　肥後

蹴鞠の新なる所の名　肥後

蹴鞠を見て詠ずる　親鸞

蹴鞠を見て詠ずる　後鳥羽

鳴るかたもなかりしかとも　俊成

行人なきあとにさくらのおちてのこりたるを　頼朝

見る人の減るにつけてさくらぬれ　橘成

こゝに新て恋歌の部の初句　内田

二度めのうつしの筋　頁爰

月花の虚空にのぼりて　菓史

机にもたれあるを詠ずる　義晩

大福寺山下の人に問ふ

まつとして世に無きものを

十六夜

浣ひや見えてかゝる雲の色か　去雅
ほとゝきすや芙蓉の二ッのやみかゝる　子信
ひさよるの新秋浣通しもし

小会

座敷をすりまわる浣ひ八重月
中のハらたまうの
名きえて縁に影さす月

去らへ人ふとふえ月しもて　座鶴
月ふのあかしと浮るる秋の月
なら茶に遊びやすき年　松疫
念佛やちらかる紙家まで　教也
森出六紀木津の茶汁汁　燈調
つれすうぬ見ぬ小袖の花　若竟
思ひ小袖まくろい羽織り　賀橘

名残

わすれぬる月をうらぶる羽衣　[illegible]
唐土の秋をすんで鳴る虫　[illegible]
たちとまるあるじ語りの小夜ふけ　[illegible]
梅見や枝折戸たたぬ[illegible]
うぶぬの新しいるさやーうの[illegible]

春の部

[illegible]八条[illegible]
あらぬにたくらんだ[illegible]

赤丹[illegible]

月新や波よりたちぬまうきぬ
海山とかすみて月の一つかな　二葉

一ぬ[illegible]八[illegible]の[illegible]
ちぬ柳折りの[illegible]八[illegible]
美ふくるよりの[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

早苗や神代の姫と紅の指

野辺やたゆる風の音　まさ見

新玉人を義（ヨモ）とまり

くれなゐの雲のいそぎ

こゝぬしの色そる　雖松庵

年ふるとゆうむたそこの月の秋

遊ぶ人ことゝ詠　一陵　松後

ちゝ〳〵ふ新そ嶺へ八峰　柳二

有孫光孫北緯　之考

うき恋八弱毒の流のうへ　多河

黄昏〳〵ふ流ふ手帰　まさ見

ちゝ緑

ふるのもよそあ京　柳二（ハキ）

結ふ　蓼ふ

抜て世のかゝ野ゆ蓼

多とそふすま酒の女　松後

きやアとゝ月れちのうつるまて　廣恵
あちらに流れてゆくもの　赤川
陳行のたゝりてほそ道　素琴
数色おろし　婦人の色　四方
ゝもあるに夫の時雨　風和
ゆきとるゝ時雨やまて　波雪
流よ言葉とゝ物ゆうに　夕意
迫い事ゆゝ　之

行潤ゝ流れて事ゝ　川和
まさ河敬川のあのさと　後
辻豊に豊を敬川　琴
姫子に似ゝやゝ風　意
ゝ風と火暑ゝ　言
様ゝ言ゝ　夕
浮世ゝ生国の事ゝ　姫
化ゝ化ゝ人ゝ

三川さのとおろすみなもの人丸行幸　琴

神楽（昔のそらゝ如代表　熊

建川の氏々開発と世の中八　烟

四三下こ新ひくそ　烟　与

亜曲家も好て叶ハぬ恋の陰　青

長者屋敷ゆゑ法花　利

赤間四十二景

風仕山　松屋

青葉や月を敷物風仕山

文亨四

さくらもゝ色ものやゝ月ゝ鹿の子　与

赤間

四三月や雪ハ見ぬ里　四三

柳ヶ瀬

瀬波のよ三川ゆ一つ乙紅柿　風和

新宮

新宮にあるやあるらん　善之

嵐川

嵐まあらしの鶴やあらし川　如雲

祝海

初汐や祝の海へ陸まれと　素川

傘松

傘もなしや松ふる雪の降ぬ時　海雪

傘松

ふる雪も雪ふるまつの月　三考

月蘭社

黄ばまるや蘭の月の花　素考

檀海

海波や蘭ふる雪の月の花　素考

豊海四部

七八年に家の出しまつ　百秋

餞別

有明の月越やまの陰影　唐秋

[illegible]　松後

[illegible]　波雪

[illegible]　蓼之

[illegible]　素川

[illegible]　素琴

浦波の書[illegible]　[illegible]

八京にくらす妹のあるを　素丸

[illegible]　長房

[illegible]

きくをやどるの秋の十四夜

[illegible]　烏秋

こゝ地　子輔

孤雲や栄枯の言のみの葉

宮[illegible]月の如くハあの[illegible]　松後

[illegible]

[illegible]

高野

園明

第五十六
宮中天神奉祭

[illegible]

[illegible]

清月亭

[illegible]

柳井

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月あきらけき道とさとれる　丈枕

表を見人の別て例の婦ら

下ゆなるを聞

おくるゝ山をゆくゝ嶺の　丈柳

ゆきの秋を知る風もなし　松後

二重箱

菊のはなもとゝ霜の降ぬ

二月ノ一折　丈枕

菊子を見の枕もとの菊ゝ

ゆき月夜ゆきゝ花の影　松後

杉形ゝ貢の後ばせあひて　丈柳

みち来る沒ゝ後の山ゝ　この友

又ゝて八ゝ花ゝ於ゝ　ゝ

紙父のいゝ形ゝ事八後八　月鶴

材本の代ゝ上ゝ大ゝ月　素琴

ことし八幡うるの志川さき　二遊

君が代の身にしきてあさる下河原　玉志

文蒲燕すわたの夢あめ　二鏡

久るしと元さて息を拝也し　英枝

訓すの市猿大名を投げ詮理　理橋

天正も文禄の世まくほめ手て　志宇

新地の市北半纏衣むす　乃当

二まくく八数きく二階の隠れなし　お月

夜紙苑や鉢月の花れ　李年

月むしやうる宰府の秋るは八　和歌

[illegible]浅山[illegible]　麦浪

元禄

緒扇の[illegible]や簞笥におう花　寿琴

煙あや常の流祭の宮　和風

二夜の月のそてさぞや帆影　月樹

[illegible]の子をかくして[illegible]の形　英枝
[illegible]のあかつきのゆくへ　二越
[illegible]の[illegible]の[illegible]　二統
[illegible]の[illegible]　[illegible]
第月に二のいもとの園　寺峯
第のもハらえ[illegible]　理枝
將風や立枝とする麻衣　支後
[illegible]月の[illegible]　[illegible]

[illegible]ハ[illegible]　為名
[illegible]　末五
第の[illegible]　[illegible]
[illegible]月や五[illegible]　[illegible]
[illegible]　可文
[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]　田[illegible]

の人〳〵この道より伝はるものの
ゐるとすれども和歌しらべ
一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ
九重の文字をもつらねて
招れて尾張の国なる熱田
月見えぬ日なる家の聖　窪二

い句表

屋敷なる花のあてなる張り弧　窪之
雅なる人の踏み分ける跡　松房

有明の月に本文の面影のて　義
とゝろ知の前とゝるに下葉　金陵
念うけとゝる風も冷ゝ野男　美
い世渡の浦伝ひ月つ見る　松見
米義の月うゝ風のまの物　物雪
ところゝ知れて美に絡張なく　多海

し句部

[illegible]の庭園（[illegible]）　義[illegible]

すゝきに移りてやる蓮の葉　[illegible]

[illegible]義の言葉[illegible]　義我

[illegible]の[illegible]　金[illegible]

市に[illegible]蓮[illegible]やきの女　雲洞

[illegible]の[illegible]　[illegible]雪

小松浦

赤[illegible]ちきよりの[illegible]て

蓮月のけむりの[illegible]に

そらゝ[illegible]の[illegible]

くゝる塩浜の[illegible]

山又[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]　[illegible]　[illegible]の月

十三夜[illegible]

塩竈[illegible]

[illegible]の中[illegible]　[illegible]

高砂行一折　　二月

新葉く波もさそふや後の月

むらふるもうつる庵の苔　　松後

炉もきる柿時に里を過て　　嘯月

屋根の張る物書て炭ふる　　琴岳

ふるるのも唐くてあるひ乃　　稚石

京ぬるうの　松　乃面をし　　一の松

志ゐて的の五枚ぬるとと　　紀行

毋の帯ふ　神ー　の結ぶ　　里義

いらくら土用の名ぬあ法い事　　也蔵

そこうれこの番句解乎　　雪溪

乞紀ーてうれるのつきとる　　合唐

腹の出ぬる　ぬ　吸ぬの　　如堂

樊ふて衣見ぬいくあるる　　龍吟

世界の母法とたなき紀書　　菊絵

身清まてさるるの紀の里　　里紀

ぬるい緑いとしく庵の長くとも　かなる
美しさ言のみなる乳の泉　まさる
洞ゆくあるる美猫　まつこ　琴二

名緑

生まれ初めてくるるあるの影　嘗吾
等神の勝月和の道の邨　まさ
数ふも秋の影や巻のみち　琴呂

うのもしや宿りの夢乳護の名　合唐
唐とも松しめるる月　俳
和やさるる遠の苦屋の物遊　の松
こと琴八月もの遊に部屋　可也
茶のもやらあるもうの人　石城
ゑゑるの主りあるる芦の風　庵仁
姫書のえするや道のたるる　知義
物の乳汗枝いるるる遊屋　雲房

菊の香やいまも酒は清めなし　桃先
移り香も伊勢ものならん嶋の数　如流
涼風やつまも菊の松葉路　如生
振袖の秋や娘のあかり少年の肌　菊庵
七夕や離れぬなかとしてまよふ　仙浪
寄る代に三元かけり川添の肌　旅書
のこされて娘は菊を折る也　里鏡
送識る励みも冬の日影哉　魏二

帰庵

この一枚八数百里の峰籠り
かれを拔けて新らしきかまの音
ひるまあそびて志ゆらく浴ら
歩を移す　素庵

ゆかしさに菊に結ぶや藤の衣
待ち得たる松の月影　松雪
蹴ひく綱は騎手押えて　房江
十六夜は言ふも男なりの　不先

凌ぎし雨風も見えハ芒の上に　瓢菜
夫れと晴より狩月の空　蕪山
ゆふかけや京へ出かけの何とそ　河亮
その二丈ハ雲隠てこれ　之山
聴かゝらハ家となる今宵かな　園口
三味線置て世草色を　松秀
揃えハ切るもいくほとりかや京　菊文
月待の宵あかき朧月　菊後

芒野のまたも沈む名ある松ひ今　遊川
ここ秋や精までの暑さ残るまで　佳紅
入相に碇る夜寒の鐘鳴て　可家
晟る雲の二の丸にあり　寸松
後の月は暮き後の観音寺　砂松
折戸へ捨てし書松の酒　虫枝
萩見むとて川さめ出る川なされいで　椰亭
果報かなおの妹ん着て来る　峯白

[illegible]の雲八幡宮の大きさ　二位
下枝ちり枝のまもさ　巴番
[illegible]　巴下
[illegible]　梅雪
[illegible]　松明
[illegible]の国なれや　梅仙
天照皇大神宮の社　青川
[illegible]　常海
[illegible]の八幡の時　庵雪
[illegible]　雄戸
四月四日[illegible]の歌　の懐
[illegible]人のまそりさ　竹浦
[illegible]郷[illegible]　松伝
[illegible]　二仙
[illegible]八幡宮の[illegible]　紀之
春[illegible]　四季[illegible]平　弘仙

諸國文通

フシコ高田

さえかへる世にふるふ身も聖霊哉　　孫也

思ひ切る事も話れぬや時鳥　　今雪

いつの世に観じてハ行く法もなかりけり　日田汲霞園亭中　寺川

萬ならよろ妹ゝ遅き春の花　　白流

行螢の道をたえの手にも告　　ノ　文鳥

二三日葉地にちりて梧桐の花　　ノ　渕雛

古酒や人を播るゝ七ツ雛壁　　ノ　此橘

芋掘るかと日影あたる庭の霰　　ノ女　笹舟

一里ゆく酒の楽み風や庭の露　　ノ　志遊

火ともしの屋根八二里しらの雪　　ノ　風仙

蚤酒よれといへ蔵多き柚子　　ノ　羽年

云人も桃を茶も咲る花多く　　ノ　三嵐

篠波も立や冷えて冬の月　　ノ　朧君

古塚の影なつしやみの雪　　ノ　可也

梅櫻の笑ひも語るつる言哉　　ノ　不二坊

初雪や孫の雪の美しきまり　山佛坊
ちれほろ〳〵ちるあれ野の風　涼南
石菖や岩間の雫しきりなる　青蘭
しら雪ハまさる菊やうの霜　松巷
苗代やはく〳〵ぬくとして詩一服　素柏
庵ハ菜の口数や物の花　而至
一点まさるこの春人さしや母の面　フセン香春
豊見えあの川筋やいなくなる　紅竹
夏洗

見灯や二の丸うろに登まく　多面
眠るやうな時雨やまるの風　素義
あぬのうら梅さかやうの菜畑　琴海
余のいろよ咲さてゐるれしきる色　鬼圓
本尾の五ちるれしてやちの後　素度
田の中に迷ひくやまのうら　柳左
石の中やまるの天井よりなる雲　ヒコ浪庄
答うと梅の宵や　三ちるのあと　松虎

風吹ぬるやうらの浦の
山里とさびしく堀やたきつせ　柳し
さいかの松をうちまぜて　雅豊
さびしき蔦のうらの浦波　此橋
あるものもむすめ　ゆきの
ちるのみてみ通りの　時雨
蔦ちや春よりこの秋の　訂後
伝あれ朝ちもあのうらの風　掬の
イヨ川江橋ちかこの中
不海

松さびて苔の岡の朝　雪柱
あらしのとよまれしむ　思其
あめのうらに入てうきしの　二体
うきまのもこれ　川辺
ゆのさやけうちかの　林山
蔦の葉ぶの風ともうちしのぶ　義鬼
風雅の雅人きてあまの風　松石
遠里や拾ちてうきの世の月　如瀧

[illegible]　玉花
[illegible]　清庸
[illegible]　巴月
[illegible]　一鶴
[illegible]　如巳
[illegible]　清風
[illegible]　山野
[illegible]　清樹

[illegible]　素渡
[illegible]　サヌキ　九兵衛　不昇
[illegible]　トサ　入田　市堂
[illegible]　三ヲ助　[illegible]
[illegible]　アハ　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　琴陵
[illegible]　[illegible]

年のうち度々来りしかども　正徳
又来る後の年四月やはりきた　年号
年号の所をたがへする事なれば　同廉
廊々に可いまし所なれば　戒淵高岳
はつかに書へ入べきてこやけ系
つくりたきて　法雲
はつかに書へ入べきてはこの月ひとつ　元年子
四月もあるべきこの月なれば　奥記
おくひ四月はの年下のまきの巻　巻三

まきて見れば　きのふ雪やゆふ　猫
とそうそうそ京枝の剪定　鼠
もつのこのこのこのこのこ　砂巾
秋海棠　炉の縁の所　文化
小屋の下に　蜂や亀　三毛
年の年の弱　海山
平清の盛　石間
山つつ見て　海油

嶋の木ハ青ち雲ふ合ひ桜の色　宗牧
立山や雪ハ青ちすまるの春　文圃
ふの日ハ人といふ庵ハ　三笑
雲ハ海ふ浮ひて雲ふ野　茅之
茅の宿や時ふ日ふ煙樹　小松島　嵐渓
芝ふ雨ふ雲ハ夕千鳥　紀瑞
投網の手ふ引ふ秋　紀瑞
如ふ雲ふ引ふ月ふ　多秋

橋ふ立て かすみ二番のそらかな　宗長
柳ふ山や法ふ孔ハ　一の宮
三ふ師の夜会事やまの面　文投
弼ふ寺ふ清ふ下　湖十
井ふ立ふ精ふ　仙丹
ふ雲ふの柱ふ　冠里
ふ二ふ雲ふ　麻極　紀可
雪の手ふ山の陰ふ　素文

廓のさゝ吹てやゝゆきて待まさき　東谿
尼寺の背戸から寒く小窓に　李青
うらゝかや寺を出て母の居る藪の雲　左堤 鹿言
桜ふりと眠る日もある柳哉　柿原 二籟
世の味ハ大なにて茶の噂　南溪
風の香見えて啼きさる雨に　綿柳
梅へ出しくる雉子も三日月　西紅
花の宴や四五里まきまきの一夜あり　梨雪
隠れ里て飛ぶ燕に入夕凪　氣一
ゆくゆくもなけれ母の姿や子燕の巣へ　几董
我もいつ見とれぬ世と知らず　ヒナウ連山 幸雲
春雨の縁へ桜ちるの風　女 琴志
雲のりやころして見るゝ朝ぼらけ　起石

蕉門書林

橘屋治兵衛板